郷土史 ていね

第 60 号
平成 24 年 12 月 12 日
手稲郷土史研究会会報

第 79 回（平成 24 年 11 月 14 日）定例会の研究発表要旨

生まれ育った樺太での体験

富丘　澤本　富延　氏

・ロシア語については、ＮＨＫのラジとテレビで行っているロシア語講座で勉強した。ロシア語の特徴は格変化と語尾変化にあるようだ。それを頭において、まずは、単語を憶えることであった。

・自己紹介をどうするか？　ということであったが、日本ユーラシア協会に相談したところ、日本ユーラシア協会の会員であることと日本国民救援会（日本の憲法と人権を守る運動をしている）の会員であることを紹介することを勧められた。そこで、それらを記した葉書大の名刺を準備した。

・稚内港国際旅客ターミナルでの乗船客は、私たち一行約 40 名とロシアの人たちであった。

・食堂で、ロシア人に挨拶の言葉をかけたところ、

　仕事は、魚の労働者である。私の生まれはネベリスクで、勤めていたところはチェホフである。電信の講習を受けたのはユジノサハリンスクである。

などの自己紹介などをしたところ、非常に親しみをこめて対応してくれた。

・ロシア人は、戦争が終わって平和を大切に考えている。その気持のあらわれであろう、戦争を終わった場所を大事にして、絶対戦争はやるべきではないということで、記念碑が各所にある。

・配布資料の中央の写真は昔の樺太庁で、今は郷土博物館になっている。

・ここでのロシア人の印象は平和でのどかで非常ののんびりしている。ここへ至るまでには様々な困難を経験してきたことであろう。

　1907 年ロシア革命、レーニンにより社会主義の社会保障などを確立され、それから 5 年間は安定していたのであろう。

　1924 年からのスターリンの政治により大変な時代になる。

　1991 年ソ連崩壊し、資本主義体制になり、今に至っている。

・年寄りが孫をつれて公園を散策しているのをみると、私が考えていた以上に平和なのんびりした印象を感じた。たまたま、結婚式が行われていたところに遭遇したが、建物の横の芝生のところで、花嫁さんだけは着飾っていたが、他の人々は普段着のままで歌を歌いながら楽しく祝っていた。日本のような華美な感がまったくなかった。

・子供の頃の記憶と比較すると、今は普通の家を壊して、マンションのような建物になり、個人の家はなくなっていた。家賃がかからないのではないかと思われる。

・ツアー参加者は大正生まれが 2 人、あと 50、60 代という構成で、自分の親たちのことを聞きたいのであるが、ガイドは 30 代の若い女性で、昔の知識に乏しく、現在のことにしか答えられなかった。昔のことについては私がガイド代わりであった。

・大泊では昔のままの家が壊さずに残っていたのが印象的であった。　（記録：小田）

第 79 回（平成 24 年 11 月 14 日）定例会の研究発表要旨

テイネイの地をたずねて

― 西野の地名と方位感覚 そして境界思想 ―

西野　　土谷　聖史　氏

一　札幌市手稲

札幌の膨張に伴う市街地化のため、現在テイネイ（よく水に濡れる所）の面影を捜すのが困難になっている。暴れ川であった発寒川や中ノ川他の小河川も治水工事により、洪水予防に成功しつつあるからである。また、「里の論理」により、発寒川左岸を右股通、右股川といい、右岸を左股通、左股川といい、手稲集落の後方の山を手稲山と名付ける。

二　石狩市テイネイ

石狩川河口に近い強い湾曲部の内側にあたり上流からの土砂が堆積し易い地形である。明治時代の絵図面によると、複数の島状に描かれている。現在は河川敷地となっているが、大正から昭和にかけて、放牧地等として民間に貸与された時期もあった。現在も土砂の堆積が続いており、もし開拓期前のアイヌがみても、正しくテイネイの地というに違いない。

三　湧別町テイネイ

サロマ湖の西岸に位置し、テイネイ漁港を中心とする、ホタテ・カキ養殖の漁師町。漁港の南側、サロマ湖に接して鶴沼があり、テイネ川が流入している。さらにテイネ川の上流部は国道 238 号線と交差しており、暗渠の橋名がテイネイ橋。テイネとテイネイが入り乱れ混乱している。

四　西野地区の方位感覚

戦前、円山小学校から見て西の野原に学田があった事から西野と命名、西町は手稲村時代は字東そして手稲東となり、分区の際西町となる。その時々の中心地から見た方位であり、真逆の方位町名は住民の総意とは到底思えない。

五　ボーダーへの関心

戦後岩見沢市幌向への移住がボーダーへの関心を惹起した。目に見えない架空の線による北村との境界、多市町村と接する幌向の地理的条件の鉄道の幌内への延進に伴い幌向原野で最初和人集落の形成と近隣町村との関係の変化。近代国家成立以前、日本による台湾の植民地化のはるか昔から続いていた。与那国島住民と台湾住民との庭先交易。尖閣の海を「入会の海」への発想と国連の信託統治の現代から未来へ向けた新たな発想が求められているのではなかろうか。

次回の予定

次回（1 月 9 日）は、一ノ宮博昭副会長の研究発表「手稲史を彩る事象…」と茂内義雄会長による「手稲歴史年表に見る大正期の手稲」（第 7 回）のおさらいを予定しております。

会場は、視聴覚室です。